

禅心裡学講義 道元の「身心・脱落」論 私考

茅原 正

Shinjin-Datsuraku in Dōgen's Zen
Tadashi Chihara (Department of Psychology, Komazawa University, Japan)

KEY WORDS: *Shinjin-datsuraku* (Sloughing off Body and Mind), *Shikan-taza* (Just sitting zazen), Dōgen's Zen

1. 身心脱落とはなにか 予云, 身心脱落来。
2. 道元・如浄の「身心脱落」 師云, 身心脱落脱落身心。」
3. 身心脱落・脱落身心 (『如浄続語録, 跋』)
4. 不是・脱落大悟の道理

「只管打坐して身心脱落」は、道元禅の核心をなす語話としてよく知られている。しかるに、その成り立ちについては、確たる記録もなく、いまだに明らかではない。

『新版 禅学大辞典』(1993年版, 大修館)には、「身心脱落」について、以下のような解説がある。

【身心脱落】 脱落は、もぬける、身も心も一切の束縛から離脱して、大悟底の境界にいたること。道元は、只管打坐が身心脱落で、坐禅を介して大悟に至るのではなく、坐禅の当体が、身心脱落のすがたであるとする。

「参禅者身心脱落也、不用・焼香・礼拝・念仏・修懺・看経、祇管打坐而已」(『宝慶記』)。

【脱落身心】 …もぬける。この身心はそのままにして、我慢我見がことごとくなくなる意。解脱。身心脱落。如浄が道元を印可証明するに当って用いた言葉。只管打坐の宗旨の根底をなすもので、身心の本来の在り方が脱落無為であり、その無為の具体的姿勢が只管打坐である。「師因入堂、懲納子坐睡云、夫参禅者身心脱落、只管打睡作麼、予聞此語豁然大悟、径上方丈焼香礼拝、

師云、礼拝事作麼生、

【身心脱落脱落身心】 …身心脱落した身心から、さらに自由であること。徹底した身心脱落の境地をいう。

「師云、礼拝事作麼生。

予云、身心脱落来。

師云、身心脱落脱落身心。

予云、這箇是暫時伎倆、

和尚莫乱印」 (『如浄続語録, 跋』)

【脱落脱落】 …道元の大悟の境界を評した如浄の語とされる。身心の当体は本来、脱落しているのであるから、脱落としかいいようがないこと。身心脱落をさらに徹底させた表現。

「予云、這箇是暫事伎倆、

和尚莫乱印、

師云、我府乱印爾、

予云、如何是不乱印底事、

師云、脱落脱落、

予乃休。」 (『如浄続語録, 跋』)

また、「只管打坐」については、ただ祇(只)管ひたすらに坐ること。坐禅に何の意義や条件も求めず、無所得・無所語の立場から端的に坐禅を實踐すること。道元は中国黙照禅の伝統を受けて、祇管打坐を強調した。

「上堂、大衆、要聽参禅者身心脱落也。祇管打坐之道理麼、良久云、心不能縁、思不能証、

直須退歩荷担，切忌當頭觸諱，風月寒清古渡頭，夜船撥轉琉璃地。」(『永平広録』4・337)

とある。要するに、「只管打坐して「身心脱落・脱落身心・脱落脱落」の語話は『天童如浄禅師続語録(跋)』が大本なのであるが、近年、この語録・跋は偽撰である、というのが定説である(注1)。文末に、「時に日本仁治(二年)辛丑(1241)の春、観音導利興聖宝林寺に書す。」とある此の書を贋作とするのは、何も目新しいことではなく、江戸時代の宗学僧、面山瑞方(1683-1769)がすでに指摘している(注2)ところであるが、「身心脱落話」の真相について、今なお不明のままである。

道元の身心脱落については、古くから、如浄と道元との面授をもって「身心脱落」とする説(面授時脱落説)と、居眠をする僧を如浄が叱咤した、その時に道元が「身心脱落」したとする(叱咤脱落説)二つの説がある。どちらも曹洞宗学の伝統的見解であり、相容れぬものであるが、その解明克服については、明治以降においても大した進展もなく、両者の是非対立を折中する程度に止まっていた(昭和19年、衛藤即応『宗祖としての道元禅師』)。

ところが、昭和44年、道元の「身心脱落」は、「心塵脱落」の聞き違いから生じたものではないかという指摘、(高崎直道『仏教の思想』11「古仏のまねび」角川書店)、また、昭和52年、「叱咤脱」はなかったとする説(杉尾玄有、山口大学教育学部研究論叢、二六巻第一部「原事実の発見の発見」)、さらに、昭和55年、知る人ぞ知る、真福寺草案本「大悟」が、突如、新たに世に紹介され(注3)、以降、従来の「道元の身心脱落話」の見直しが盛んになされるようになった。すなわち、それは「先師、よのつねに衆にしめしていはく、参禅者身心脱落、不是待悟為則」というものであり、従来の「参禅は身心脱落也、不用焼香・礼拝・念仏・修懺・看経・祇管打坐始得」と説かれてきた言葉に反する見解である。

この草案本「大悟」における「身心脱落」の話は、道元禅の核心をつくものである。宗門の若手研究者により、「雨後の筍」の如く、大いにその議論がなされたが、平成、令和のこの間も、依然として大した成果もなく、道元の「身心脱落」は、「面授時脱落」か「叱咤時脱落」か、宗学上の「踏み絵」の如くに止まっているのが現状である。

「出家道元は希代の大家である」、この思いを念頭に、以下、「道元の身心脱落」とはなにか、検討してみよう。

1 身心脱落とはなにか

「身心脱落」は、道元の用語であり、造語である。また、その意味するところ、宗門の内外によっても微妙にことなり、一概に表すことがむずかしい。

[心身症]、[心身医学]など、今日、精神と身体との関係をめぐる問題に対しては、こころとからだ、「心身」の表記が一般的である。古く江戸時代の「日葡辞書」(1603-04)には、Xinjin Cocoro(心)、mi(身)とあるが、Xinjinの漢字表記は不明である。「心身」を最も早く採録したのは「辞林」(明治4年改丁)であり、以後、多くの辞典が「心身」を採録するようになった。また、終戦前ごろから、「しんしん」の見出しのもとに、「心身・身心」と表すものが多くなったという巷間の説もある。

道元の道う「身心(シンジン)」は、所謂、身体(からだ)と精神(こころ)で、われわれの存在自体、そのものを意味するのであるが、仏教の用語、術語とは、必ずしも言い難い面がある。

ここで、今一度、わが邦古人の「心・身」観を確かめておこう。

『精選版 日本国語大辞典』2006年、小学館

しん-しん【心身・神身】

[名](古くは「しんじん」とも)⇒しんしん(身心)1.

*観智院本三宝絵(984)上「海みの中に如意珠有なり。心身に行て求む」

*古今著聞集(1254)二〇「この僧件はれて、心身もなやみて、いける正体もなかりけり」

しん-しん【身心・身神】

[名](古くは「しんじん」とも)

1. 身体と精神。からだところ。心身。心人。

*観智院本三宝絵(984)中「松葉をくひ物として清泉をあみて身心のあかをあらひ」

2. からだ。身体。心をあわせもつからだ。

*方丈記(1212)「身心の苦しみを知れば、苦しむ時は休めつ、まめなれば使ふ」

我が国では、道元の生きたその時代、「身心」、
「心身」どちらも、当然に使われていた。これに対し
て、本場中国においては、「身心」という言葉は、
今も昔も「日常茶飯」語ではない、というのが巷
間の説である。

さらには、道元の「身心脱落」は、如浄の「心
塵脱落」の聞き違いではないかという見解（前掲）
もあらわれ、「身心脱落」にまつわる「身心」の探
求は、「五里霧中」の“もぬけ”な話しになってし
まった。そこで、此处では、道元の「身心」が、
道元禅、根本宗旨の「修証一等」、「身心一如」に
あることの確認に止め、続いて、本稿主題の「道
元の身心脱落話」の成立に論を進めたい。

「身心脱落」とは何か、という問いに対して、「肉
体（身）も精神（心）も、一切のとらわれをのが
れて自在の境地に入ること。この身心のままです
とすること」（中村元著『仏教語大辞典』東京書籍）
というような答えが、一般的、標準的な意味と思
われる。一方、伝統的宗学の立場からは、本論、
冒頭に示したように、

1. 身も心も一切の束縛から離脱すること。
2. 大悟底の悟りの境地にいたること。
3. 坐禅の当体が身心脱落そのものであり、
さとの境界である。従って、覚りや心
体的体験等は否定される。

なおまた、「坐禅こそ、身心脱落である」という
確信に到った機縁、とする理解もある。

かくの如く、一般、宗学、いずれの立場におい
ても、「身心脱落」に関わる意味解説は、実に抽象
的指示に過ぎず、まさにナンセンス（nonsense）
で、その本質を語らない。もっとも、正体しれぬ
「身心脱落とは何か」等という問いそのものが、も
はや「無意味」なのであって、実際の坐禅なしでの
「身心脱落・大悟」の「理解」は無理なことになる。
われわれが卒直に、素直に素朴にふに落ちる、端
的なる説示はないものか。

『永平広録』巻7・498上堂は、「端的」どこ
ろか、むしろ長い説法であるが、その冒頭に、

行解俱に備うるを方に祖師と曰う。
その行と謂うは、祖宗の密行を謂うなり。
その解と謂うは、祖宗の解会を謂うなり。
仏祖の行解は、解すべきを解し、
行すべきを行ずるのみなり。

とあり、続いて大慈・洞山・雲居・洛浦・宏智
の説・行に関する見解を示教して、最後に
五位の尊宿、各おの恁麼道う。
永平今日、甚としてか不道なる
横説堅説、妙行密行に一如なり。
妙行密行、横説堅説に一如なり。

と結んでいる。「横説堅説」は禅語であり、『正
法眼蔵』「仏向上事」巻においても二度使われてい
る。その意味するところ、文字どおり、縦横無尽、
自由自在の仏法の展開ということであるが、実に、
「身心脱落」、何ものにも束縛されぬ「大悟」の境
界」を示すに足る言葉だと思う。「横説堅説」の語
は、「脱落大悟」そのものを語るものではないが、
道元の「身心脱落」、その真相を解く「関振子」（注
4）といえよう。

さて、「身心脱落」の語を「身心・脱落」に解体
し、「順逆縦横」の変換操作を加えてみよう。する
と、「身心」においては、

表1

	(順)	(逆)	(縦)	(横)
(順)	身心・心身・身身・心心			
(逆)	心身・身心・心心・身身			
(縦)	身身・心心	身心・心身		
(横)	心心・身身	心身・身心		

以上のようになる。すなわち、表中、どの位相
における「身心」も同等同値であって、所謂「身
心一如」を表わしている。実際に「身心」、「心身」、
「身身」、「心心」の語は、道元の著作において、多
少の差はあるとはいえ、すべて認められる。もは
や、「心身」か「身心」かの次元ではない。確かに、
道元が敢て随処に、「心身」ではなく「身心」を使
用するのは明白な事実であるが、仏祖正伝を標榜
する道元が、「全身」、「身即仏法」、「身心脱落」、
「身心一如」等々と表わすところ、その実は、道元
自身の素朴にして、私意あらぬ「志意」かもしれ
ない。因に、平川彰『仏教漢梵辞典』においては、
「心身～manas-kāya」の1例に対し、「身心
～kāya-citta～」は13語採例されている。

次いで、「脱落」についての操作変換は、つぎの
ようになる。

表2

	(順)	(逆)	(縦)	(横)
(順)	脱落・落脱・脱脱・落落			
(逆)	落脱・脱脱・落落・脱脱			
(縦)	脱脱・落落・脱脱・落落			
(横)	落落・脱脱・落落・脱脱			

また、「脱落」を成す単語、それぞれの主要な意味を挙げてみよう。

「脱落」の脱はダツ。

- ① ぬぐ。ぬげる。
- ② やせる。肉が落ちる。
- ③ ぬける。ぬけ落ちる
- ④ ぬかす。落とす。
- ⑤ ぬけ出す。のがれる。
- ⑥ おろそか。おおまか。
- ⑦ もし。かりに。

熟語としての「脱脱(タイタイ)」は、
ゆったりした形容。
また、よろこぶ。

「脱落」の落はラク。お-ちる、お-とす。

- ① おちる。落下する。
- ② 抜けおちる。
- ③ おちぶれる。衰える。
- ④ 少なくなる。死ぬ。
- ⑤ おさまる。きまりがつく。
- ⑥ 手に入る。ころげこむ。
- ⑦ おとす。抜かす。
- ⑧ また、はじめる。始まり。
- ⑨ まつわる。つなぐ。

『新漢語林』第二版
(大修館書店)

等々であるが、この「脱落」に及ぼす変換操作の結果は、一見して、文字どおり、自由自在に展開する境界を示していない。「脱・落」は、同義・同語・類語の無用な繰り返しのトートロジー(tautology)ということになる。先の「身心」の場合は、身も心も、それぞれ、「名」は「体」を表わし、身心・心身・身身それぞれが、能所の用を内含、意味する「身心」であったが、「脱・落」においては、わずかに、「そこから又ははじめる」という、

方向を異にする用語もあるが、大概是、同義同語の反復で、意味なき無用の繰り返しにすぎない。「身心脱落」語は、「皮・肉・骨・髓」の如く、かくされた真の姿、その本体をあらわすことは出来ないのだろうか。

そこで、只管打坐して身心脱落、修証一等、身心一如の道元禪、修を「身心」、証を「脱落」と措定して、「横説堅説」すなわち、「順逆縦横」(I・R・N・C)の操作変換を施してみよう。

順(等置) 逆(逆) 縦(否定) 横(対偶)
I R N C

表3

	等置	逆	否定	対偶
等置	身心脱落	脱落身心	身心身心	脱落脱落
逆	脱落身心	身心脱落	脱落脱落	身心身心
否定	身心身心	脱落脱落	身心脱落	脱落身心
対偶	脱落脱落	身心身心	脱落身心	身心脱落

身心(Q) 修
脱落(P) 証

すなわち、順逆縦横、自由自在、「脱落大悟」、「本来の面目」がここに実現、展開するのである。秋重義治博士は、このような「修証一等、身心一如」の道理構造を「脱落の論理」と称し、発表した(注5)。

さて、ここまで、「身心脱落」語の観点から、道元の「身心脱落」について検討してきたのであるが、結果、一般的見解として、「身も心も抜けおちて、自己本来の面目に目覚めること」。宗門の立場からは、道元の悟りは「面授時脱落」か、「叱咤時脱落」かという、卒直かつ具体的なる問題に行きつくことが分かった。古来、伝わるように、仏道参学には参師聞法、合わせて工夫坐禅が必須である。本稿も、以後、「只管打坐して身心脱落」話を主にとり上げ、道元・如浄の身心脱落について検討考察してみよう。

2 道元・如浄の「身心脱落」

道元の「身心脱落話」の発端は、『宝慶記』にある、というのが今日の通説である。此書は、道元の入宋時代、宝慶元年(1225)から同三年にかけて、本師如浄から慈誨(示誨)された仏法の真髓を、四十数項目にわたり、まとめたもので、道元入滅後に、弟子の懐獎によって見い出された。

この『宝慶記』には、如浄が「身心脱落」について説明している部分有三箇所ある。

先ず、15 示誨は、如浄が、参禅は身心脱落であると、只管打坐の要を説く。

15 堂頭和尚示曰。
参禅者身心脱落也。
不用烧香・礼拝・念仏・修懺・看経、
祇管打坐而已。

拝問。身心脱落者何。
堂頭和尚曰。身心脱落者、坐禅也。
祇管坐禅時、離五欲、
除五蓋也。

次で、29 慈誨では、如浄により、只管打坐こそが、六蓋を除くと説かれる。

29 但除五蓋・六蓋、有秘術、也無。…

祇管打座作工夫、身心脱落来、
乃離五蓋・五欲等之術也。
此外部無別事、渾無一箇事。
豈有落二落三者也。

最後は、31 示誨で、如浄が、仏祖の身心脱落は「柔軟心」とであると説く。

31 是故仏祖、常在欲界坐禅弁道。
於欲界中、唯臆部洲最為因緣。
世々修諸功德、得心柔軟也。
道元拜曰。作麼生是得心柔軟。
和尚示。弁肯仏祖祖身心脱落、
乃柔軟心也。

以上、『宝慶記』に著る 15, 29, 31 の示誨（慈誨）は、道元・如浄の「身心脱落」観をよく表わすとともに、難儀な問題をも提起する。

如浄の語として伝わる「身心脱落」の語話は、言葉の前後や表記に、多少の異同はあるにしても、そのほとんどが同一である。とりわけ、

「参禅者身心脱落也。
不用烧香・礼拝・念仏・修懺・看経、
祇管打坐始得。」

と、『宝慶記』15 示誨に現わるこの文言は、一

字一句違わぬ決まり文句であり、『正法眼蔵』「弁道話」, 「行持」, 「仏経」, 「三昧王三昧」, 『永平広録』等にも数多くの引用がある。果たして、如浄は何を根拠に、このような説示をなしたのか、その典拠については、諸々の注解書、ことごとく、「未祥」とある。如浄の「身心脱落」語は、『如浄録』には、見当たらない。出典不明である。ともあれ、道元が如浄から得たと伝わる、簡潔かつ完成したこの文句、「たとひ偽なりとも」, 「身心脱落」語話の極みと言えよう。

そこで、完結、完成したこの「身心脱落」文を、さらに分析検討すると次のようになる。

『宝慶記』15 示誨

- A 堂頭和尚示曰。(先師天童如浄)
- B 参禅者身心脱落也。
- C 不用烧香・礼拝・念仏・修懺・看経
- D 祇管打座而已。

項目 A は、堂頭和尚、すなわち如浄禅師の言か否かの確認で、「身心脱落」そのものを語るものではないが、先ず第一の要素である。これが無しでは話しにならない。

項目 B, C, D は、「身心脱落」語を成す構成、及びその言葉である。この配列に順位、優劣はないが、表記された言葉自体の意義は大きい。

以上、『宝慶記』における「身心脱落」話は、四つの要素を根本に成り立っていることが分かる。はじめから自明のことだが、これは、授用－受用の面授のやりとりなのである。如浄－道元の「親密」なる間に生まれた「脱落話」を道元が記述した容になっているが、本当のところは誰も知り得ない。「身心脱落」, 「不用烧香・礼拝・念仏・修懺・看経」など、如浄の言説、その典拠すものは皆無であるにも拘らず、道元撰述の書には、「先師天童云く」の型で、多くの引用が認められる。如浄にせよ、それを引いた道元にせよ、「脱落」話の出処を語らない、語れない。実際に、われわれが道元の撰述書にある「不用烧香、…」の文句を引く際に、「出典不明、しかし『宝慶記』には、この記述あり」という奇妙な「注」に出くわすこともある。

そこで、道元の「身心脱落話」の成りゆきを確認する意味もあり、これから『正法眼蔵』における「身心脱落」を探ってみよう。

宗門の正規に云く、単伝正直の仏法は、
最上の中に最上なり。
参見知識の初めより、
更に焼香・礼拝・念仏・修懺・看経を不用、
唯だ専ら打坐して、身心脱落する事を得よ。

草案本（弁道話）
寛喜三年（1231）

宗門の正伝にいはいはく、この単伝正直の仏法は
最上のなかに最上なり。
参見知識のはじめより、
さらに焼香・礼拝・念仏・修懺・看経を
もちあらず、ただし打坐して
身心脱落することをえよ。

本山版『弁道話』
寛喜辛卯三年
中秋（1231）

道元帰朝後、「身心脱落」を語る最初と思われる
のが、この『弁道話』である。草案本、本山版、
両者ともに『宝慶記』における、如浄の「身心脱
落語」の再言である。ことに、「ただに打坐」して、
「身心脱落」、「不用焼香・礼拝・念仏・修懺・看経」
は、一言一句違わぬ再言である。

しかるに、冒頭にある、「この単伝正直の仏法」
すなわち、「ただに打坐して身心脱落」は、宗門の
正規、正伝であって、天童如浄の言ではないこと
が言明されている。尤も、安直に、天童如浄の言
は宗門の正規、正伝なり、ととらえるならば、話
しは別であるが。

この「弁道話」における「身心脱落」語話は、
「行持（下）」巻に現出する。「先師は、十九歳より
離郷尋師、弁道工夫すること、六十五載にいたり
て、なほ不退不転なり。…衲子を教訓するにいはい
はく、参禅学道は、第一有道心、これ学道のはじめ
なり。」など、如浄のひととなりを紹介するその間、
不意に「又はいはく、参禅者身心脱落也、不用焼香・
礼拝・念仏・修懺・看経、祇管打坐始得」と、例
の「身心脱落」語が現出する。

この「脱落語」のあと、先師、よのつねに普説
す、われ十九載よりこのかたあまねく諸方の叢林
をふるに、爲人師なし。…かくのごとく上堂し、
かくのごとく普説するなり。又、諸方の雲水の人事

の産をうけず。とつづくのであるが、この「行持
（下）」巻中、「先師はいはいはく…」の言説があいまいで
ある。完璧なる「身心脱落」語の冒頭は、「又はい
はいはく」ではなく「先師天童」である。「行持（下）」
（仁治三年（1242）興聖寶林寺）につづいて、寛元
元年癸卯（1243）吉峰寺示衆の「仏経」巻は、次
のようにある。

先師尋常道、我箇裏、
不用焼香・礼拝・念仏・修懺・看経
祇管打坐、弁道工夫、身心脱落。
かくのごとくの道取、あきらむるともがら、
まれなり。ゆゑはいはいはく。
看経をよんで看経とすれば濁す、
よんで看経とせざればそむく。
不得有語、
不得無語、速道速道。
この道理、参学すべし。
この宗旨あるゆゑに、

古人云、看経須具看経眼。
まさにしるべし、古今にもし経なくば、
かくのごとくの道取あるべからず。

**脱落の看経あり、
不用の看経あることを参学すべきなり。**

…あらゆる仏経は正法眼蔵なり。
一・異にあらず
自・佗にあらず。

「仏経」巻は、意味、内容は変わりはないが、言
葉使いが、これまでの「先師如浄はいはいはく…」の文
句とやや異なる。また、「かくのごとくの道取あ
きらむるともがらまれなり」、「脱落の看経あり、
不用の看経あることを参学すべきなり」と述べてい
る。これは、如浄の「身心脱落、不用看経」説に、
何やら反する意見であるが、いわゆる「身心脱落・
脱落身心」の萌芽とも考えられる。この翌年の寛
元二年（1244）には、道元坐禅の極意、「三昧王三
昧」の示衆がある。

「三昧王三昧」は、『正法眼蔵』中、坐禅につい
て直接かたる最後の巻といえよう。全体が、簡潔
なる文体で、いはば、道元の坐禅観の総集とも言
える。後半は「大智度論」からの引用が二つあり、
その解説が主文になっている。

この巻の前半部には

「まさにしるべし、坐の盡界と余の盡界と、
はるかにことなり。…
正當坐時は、盡界それ豎なるか、
横なるかと参究すべし。

正當坐時、その坐それいかん。
翻筋斗なるか、活鱔鱔地なるか、
思量か、不思議か、
作か、無作か
坐裏に坐すや、身心裏に坐すや、
坐裏身心裏等を脱落して坐すや。
恁麼の千端万端の参究あるべきなり
身の結跏趺坐すべし、
心の結跏趺坐すべし、
身心脱落の結跏趺坐すべし。

と、これまでに見ない、道元独自の見解を示した後、突如として、例の「先師古仏云、参禅者、身心脱落也。祇管打坐始得。不要焼香・礼拝・念仏・修懺・看経。」につづき、「あきらかに仏祖の眼睛を抉出しきたり、仏祖の眼睛裏に打坐すること、四五百年よりこのかたは、ただ先師ひとりなり、震旦国に斉肩すくなし。と如浄を参ずる文句が入り、その後は、

打坐の仏法なること、
仏法は打坐なることをあきらめたるまれなり。
たとひ打坐を仏法と体解すといふとも、
打坐を打坐としれる、いまだあらず。
いはんや仏法を仏法と保任するあらんや。
しかあればすなはち、心の打坐あり、
身の打坐とおなじからず。
身の打坐あり、
心の打坐とおなじからず。
身心脱落の打坐あり、
身心脱落の打坐とおなじからず。

既得恁麼ならん、仏祖の行解相応なり。
この念相観を保任すべし。
この心意識を参究すべし。

とあり、道元独自の見解のあと、後半は『大智論』の引用に続く。

この「三昧王三昧」巻は、前年、「仏経」において「脱落の看経、不用の看経あり」と言った、道元の思いが明確に表われている。また、三つの打坐の区分や「念想観の保任、心意識の参究など、如浄の「身心脱落」とは異なる、道元独自の「身心脱落」説が展開する最中、何故、如浄賛辞をはさむのか、「身心脱落の打坐あり、身心脱落の打坐と同じからず」は意味不明、等の問題が残されたが、その解明については、この後につづく『永平広録』、ならびに草案本「大悟」等の検討考察をまたねば成らない。

注

- 注1 鏡島元隆『天童如浄禅師の研究』、春秋社、「序章」9～11頁。第一章第四節「『如浄続語録』について」35～40頁。
- 注2 面山瑞方(1683 - 1769)、『天童如浄禅師行録』延享九年(1744)刊、「近年所刻之如浄語録、日本洞下好事者贗撰、是故不栄」。
- 注3 河村孝道「『正法眼蔵』成立の諸問題(六)一真福寺文庫所蔵『大悟』巻草稿本の紹介」『駒澤大学仏教学部研究紀要』38号、1980。
- 注4 関振子(かんれいす)
① ねじ、しかげ、からくり。
② 物事を動かしたり、変化させたりする原動となるもの、かぎ。
③ 仏語。禅宗で、言葉では表わせない奥義。
- 注5 秋重義治「禅の心理学」、理想社、『講座仏教思想』第四巻、昭和五〇年、337 - 413頁。